事業報告

平成5年度

公開講座概要

総合研究所は、奈良の地にある大学として特色ある研究を推進するとともに、学内において成された研究成果を学外一般に対して公開する役割をも担って来た。これに関連し、これまで開講して来た文化講座、社会学部公開講座、桜井市生涯学習シリーズ奈良大学教養講座に加えて平成5年度からは「都祁村生涯学習シリーズ奈良大学教養講座」も開講された。桜井・都祁で開かれた教養講座は教養部が主体となり、文化講座は文学部が中心となって開催され、また社会学部でも「まちづくりフォーラムinなら」－クリエィティブでファィンな地域にするために－をテーマに奈良市内ならまちセンターで公開講座を開催、96名が参加し熱心に意見の交換が行われた。

14年目を迎えた文化講座は、前年同様、近畿文化会と共催し奈良近鉄ビル4階奈良歴史教室で230名の受講者を集めて開かれ、桜井市教養講座は130人の市民の申し込みがあり、また都祁村でもおよそ93人が受講するなどいずれも盛況裏に閉講することが出来た。

桜井市生涯学習シリーズ

奈良大学教養講座

－外国語を通してみた日本－

5月9日　国際化とカタカナ文化

武　久　文　代

今日の日本をとりまく国際化の風潮の中で、外国語、特に英語に対する関心と必要性は、ますます高まって来ている。最近の目まぐるしい世界情勢の変動に伴い、国家間の融合傾向が進み、また、衛星放送の発達により世界各国の重大ニュースも一瞬にして茶の間に飛び込んで来る現在、我々の日常生活においても国際化の影響を受けざるを得ない。こうした社会状況に敏感に反応を示すのは、言語現象であり、その一例が最近のカタカナ語の氾濫と言えよう。終戦後、急速に高まった英語への関心とカタカナ英語の流行を凌ぐ程に、最近のカタカナ英語の過剰な使用が目に付く。このような現状を把握・分析するとともに、日本語の発達の中で一つの特徴となっている外来語の借入と日本語への順応化について分析を試みた。

新聞や雑誌を開くと、特に、広告欄には、活字化されたカタカナ英語が多用されていることに気付くことがあろう。誰もが、少々の戸惑いと、新しい時代の流れに乗り併せている気分に浸っているうちに、日本語の乱れが日常化して行くことが懸念される。また、このようなカタカナ文化が国際化であるとの思い違いもなきにしもあらずと言えよう。この機会に真の国際化とは何かについても併せ考察した。

6月20日　パリ・ビーレフェルト・日本

中　川　寿　夫

過去、ＵＳＡやカナダといった北米二ヶ国ではあれこれ加えれば３年間近いそれなりの生活体験を有するものの、ヨーロッパとなると今から10年以上前に約一カ月程度駆け足で数ヶ国を観光旅行して回った経験しかなかった。しかるに、欧州（旧ソ連圏諸国も含めて）が大きく変化しつつある1991年３月末から翌年４月半ばまでの１年間強、幸運にも私は主としてドイツ・フランスの二ヶ国で生活できる機会を得た。統一ヨーロッパが現実のものとなりつつあり、日米欧の三極構造がささやかれる今、これは私の専門分野の研究を離れて単なる一日本人として考えてみても仲々に興味深い体験ではあった。

ここでは、歴史的変革の時に、変革の地に滞在できたという貴重な体験を主体として、非専門家（ちなみに私の専門は理論物理である）の一日本人が、ドイツの小都市ビーレフェルトとフランスの大都市パリ、それも主たる生活の場は両都市の大学という極めて限定された環境下であるにしても、ともかくもそこで１年間生活することを通じて感じたことなどについて述べてみた。

7月11日　国際化時代と実用英語

山　田　隆　敏

近年、我が国は国際社会の中でさまざまな分野にわたり大きな役割を果たすようになってきた。その中で役に立つ生きた英語を理解し活用する能力が不可欠の条件となりつつある。

そこで、このような時代の要請にこたえて、さまざまな「実用英語技能検定」の制度が設けられた。例えば、広く「英検」の名で親しまれる「日本英語検定」、「トーフル」、そして「トーイック」などの志願者は、年々増加の傾向にある。この現象は、あらゆる分野で国際化が進み、正しい意味での crosscultural communication がますます必要になってきた結果だと考えられる。

ここで国際化時代における英語の言語的背景と実用英語の現状を紹介した。

9月12日　　新しい英語教育の展望

ジェームズ・スワン

移民国家であるアメリカは極めて複雑な言語状況をかかえています。多くの移民一世は英語を習得することができず、このため場合によっては、英語しか話せない自分の孫と話をすることができないという人々もでてきます。近年日本でも、日本語以外の言語を母語とする人々が多く生活するようになってきましたが、それでも多数の異民族（異言語）が共生するアメリカの言語状況とはだいぶ様相を異にしています。

このような社会言語的背景の違いは、両国の英語教育の仕方に反映されています。この講座では「外国語としての英語教育(EFL)」（日本）と「第二言語としての英語教育(ESL)」（アメリカ）の違いを解説し、加えて、外国語教育／第二言語教育で用いられている様々な教授法を紹介しました。

－生命の尊厳をめぐって－

11月７日　　心に残る「闘病記」

いま人はどのように死を迎えているのかを考える

大　町　　公

死はいつの時代においても人生の一大事である。かつて、死について、死後の世界については宗教が教えてくれていた。しかし、現代の宗教はかつての時代のように、われわれに対し十分な力を持っていない。死への対処の仕方を誰も教えてくれない今、われわれはどのように死を迎えようとしているのだろうか。

現代は日本人の四人に一人がガンで死ぬ時代である。有り難いことに、多くの人がガンの宣告を受けて以来の自らの闘いの記録を残してくれている。それらは文字どおり生死を賭けた闘いの報告である。印象に残るものは数多いが、その中から、原崎百子の『わが涙よわが歌となれ』、西川喜作の『輝け我が命の日々よ』、千葉敦子の『「死への準備」日記』など特に評判を得たものを取り上げ、現代の日本人は死を前にして何を考え、何をし、いかに死んで行くのかを見、現代日本人における死を検討する。彼らが最後の日々を人生で最も充実した日とするために精一杯生きた姿は、われわれの日常生活を深く反省させてくれると同時に、われわれによりよく生きることを促してくれるであろう。

1月16日　バイオテクノロジーと生命倫理

藤　原　　剛

分子生物学の進歩は遺伝の仕組みを始め、いろいろな生命現象の仕組みを明らかにしてきた。これらの研究から得られた知識を基にして遺伝子を操作、加工して有用な性質を持つ作物や医薬を作り出すことが出来るようになり、多くの利便をもたらしている。ごく最近では患者に新しい遺伝子を組み込むことで遺伝病を治療しようという試みも始まった。これらの成果は遺伝病に苦しむ人々にとって大きな福音である。しかしながら、これらの技術はこれまで神の領域とされてきた生命そのものに人間が手を加えることであり、これまで我々が抱いてきた「人の命は地球よりも重い」という生命観が大きくゆらいでいる。私はこれらのバイテクは無制限に応用されるべきではなく、きちんとした倫理的基準に基づいて行なわれるべきであり、そのような倫理的基準を早急に確立することが必要であると考えている。

ここでは最近のバイテクの進歩についての技術的な解説を行ない、この技術の倫理的問題について考えた。

2月20日　人間形成的観点からみた「生－死」

田　井　康　雄

「人間が生きる」ということの意味は、「単に生命を維持している」にとどまらず、何らかの目的意識を持ち、その目的に向かって積極的に生きている時に、初めて重要性を持ってくると考えられる。しかも、その目的は人生の各時期においてそれぞれ固有の存在意義を持って現れてくる。しかし、また、人間は人生のひとつの大きな目的に向かって努力することもできる。このような二種の目的（人生の各時期の目的と人生のひとつの大きな目的）を、人間は意識的に持つことができるが、それらは必ずしも実現されるものばかりではない。それ故に、これらの目的がうまく実現されたり、互いに調和する場合に、我々は「生きがい」を感じ、更に充実した人生をおくっていると感じるのである。そこで、我々が「生きがい」を持って、充実した人生をおくっていくために、次の各項目について順次考察していった。1．人間形成の意味　2．人生における諸段階　3．人生の二種の目的　4．生きがい　5．生と死の関係

3月13日　いのちを生きる

市　川　良　哉

日本人の平均寿命は世界一、二を争うほどに伸びて、その人口は高齢化に向かっている。こうした今日、人間のいのち（生命）はなぜ尊いのか、が改めて問われている。時代の傾向とし

て、有用なものは価値があるが、無用なものにはないとする考えがある。日常に使う用具類にしても、より便利なものが求められ、価値があるとされ、量産された。こうした考えを人間に適用するとどうなるのか。高齢となり看護を必要となった人間はもう無用であり、生存する意味がないというのであろうか。私たち一人ひとりがなぜ人のいのちは尊いのか、の答えを得ない限り、真の福祉社会は成立しない。

現代は“量”ではなく、“質”が問われてきている。従来、日本経済は“量産”が重んぜられて繁栄の一途をたどった。しかしそれに反省が起こり繁栄の“質”が問われるようになった。世界は二大国の冷戦構造に依存してわずかに平和を保ってきた。しかし、旧ソ連が崩壊して、その平和の“質”が問われていくかに見える。人間の寿命が量的に伸びたことは喜ばしい。同時に、生きることの質的な意味が問われなければならない。“いのちを生きる”ことがもつ意味を考えてみた。

都祁村生涯学習シリーズ

奈良大学教養講座

「生活文化を考える」－ゆとりと豊かさを求めて－

5月30日　　豊かな生をどこに求めるか

－生涯学習に寄せて－

市　川　良　哉

今日、“量”ではなく“質”が問題になっている。日本経済は量産が重視されて繁栄をもたらしたが、それに反省が起こり繁栄の質が問われるようになった。世界は二大国の冷戦構造に依存して平和を保ってきたが、旧ソ連が崩壊して、その平和の質が問われていくかに見える。人間の寿命は量的に伸びたが、生きることの質的な意味が問われなければならない。

“生涯”という言葉にはどんなニュアンスがあるのか。ある哲学者は生の三つの様相が統合されているとして、一は人生、二は特定の社会の特定の時代における「歴史的生」、三は独特なニュアンスがこめられて一生の生の質の如何、あるいは自己の在処の「何処」をいう「境涯」というニュアンスがある、といいこの三つの意味を上げている。

“生涯”という言葉に“生の質の如何”が問われる意味を見るならば、生涯学習ということもよほど深い意義をもつことになる。その目指すところはいかに生きることの質を高めるかにかかわる。“豊かな生”ということもそのような意味に沿って求められなければならない。それを「妙好人」と呼ばれて、市井に生きた人たちの具体的な生き方の中で見てみた。

7月18日　東山内在地武士の動き

朝　倉　　弘

中世後期の東山内在地武士の動きについての疑惑

疑惑と考えられる事項を、1～2あげてみると、つぎの通りである。

まず小山戸顕国が、南朝方の忠臣北畠氏の配下となり、北の字を賜って北氏を称した年次は「北氏系図」に暦応元年（1338）と記されている。ついで、同実兼の出生については応安4年（1371）とみえる。また興福寺領越前国河口庄が斯波道朝に横領されたとき、興福寺により彼が道朝方へ派遣されたが、その年次が貞治3年（1364）とある（貞亨元年－1684－の「北氏記録」)。その次の実愈（まさ）の出生の年次については明徳2年（1391）とみえるが、これらの年号は、すべて北朝年号である（『大和志料』718～9頁)。南朝の忠臣北氏の記録に何故北朝年号が使われているのであろうか。一方『大和志料』等で見る限りでは、南朝方の年号は1点のみで（来迎寺五輪塔)、その他は北朝年号のものばかりである。

8月29日　情報化社会と人間のゆくえ

－情報化の進展に伴う「知価」の意味を考える－

高　見　　茂

今、世界は、膨大な知識と情報を提供する高度技術の発達によって、資源の有限性と地球環境の保護の重要性を察知すると共に、時間余りを実感している。コンピュータと通信回路の発達で、瞬時に利用しうる知識と情報の量は、20年前に比べて何倍にも増大する一方、その利用コストは驚くほど低減した。今後もこの傾向は一段と進み、近未来社会は、時間余り社会であると同時に知識と情報の豊富な社会、すなわち「情報化社会」へと近づくであろう。そしてその社会の内実は、こうした人工的に創造された新しい豊富な資源（＝知識と情報）を利用した知恵の値打ち＝「知価」が経済の成長と企業利益の主要な源泉となるであろうと予想される。その予兆は既に現れている。たとえば教育の領域における受験産業の隆盛は、偏差値を中心とした情報（＝知価）独占に支えられたものであるし、1990年代のバブル経済の崩壊は、ある意味では「知価」に支えられた側面を持つ現代経済の本質を如実に示すものであったといえよう。本講座では「知価」の意味を平易に解説し、それが人間生活に及ぼす諸影響を探った。

11月6日　雅楽公演と講演

－雅楽の公演と雅楽についての講演－

笠　置　侃　一
奈良大学雅楽愛好会

奈良はシルクロードの終着点だといわれる。これは、いわゆるシルクロードを通じて交流していた文化が、唐の都・長安から更に平城京にもたらされ、天平文化として開花したことを意味している。しかも、当時の文化がいまもなおそのまま奈良の地に生き続け、いつでも目にすることができるからである。正倉院宝物をはじめとして、建築や仏像などはいうまでもなく、雅楽もまさにシルクロードの終着点そのものというべきである。雅楽はシルクロードを経て古代諸外国の音楽が日本にもたらされ、わが国固有の歌舞とともに伝えられてきたものである。現在の雅楽は遣唐使が廃止されたあと、楽制や楽器の種類、演奏方法などにかなり日本化のあとが見られるが、楽器・楽面・装束・楽曲やその名称・リズムなど随所にいまもなおそのあとかたを見ることができる。古代シルクロードの音楽はそれぞれの母国ではすでにその伝統が失われ、そのままの形で見い出すことはむつかしい。しかし、奈良には古代の姿そのままに伝えられ、しかも雅楽のなかに古代が息づいているのである。

今回は、奈良大学雅楽愛好会の学生たちによって、「胡蝶」と「五常楽」の二つの舞いを演奏し、雅楽を通じて古代シルクロードの世界に思いをはせていただくことができた。

12月12日　家族関係を考える

東　山　弘　子

今、日本の家族は揺れている。社会が文明化され、物質文明が円熟してくるのに反比例するように、家制度が崩壊し、人生80年時代にはいって個人のライフサイクルはおおきく変化した。「個」としての自分を追求する傾向が強まるなかで、家族に危機が忍び寄ってきたのである。家庭内暴力、離婚、登校拒否……。

「家族」は生きている。家族は関係の中で動くものである。従って家族のトラブルが起こった時に悪いことと思わずに、「健康な家族に再生」するチャンスがきたと考えて自分たちの在り方、生き方を真剣に直視し、そのプロセスをやりぬく時、新しいものが生まれてくる。家族のトラブルは、たしかに危機ではあるが、再生の可能性という一面をもっていることを逃してはならない。

本講では、臨床心理学的観点から、親子、夫婦、兄弟の深層の関係に触れながら、「今、家族とは何か」について論究した。

2月27日　こころとことば

堤　博　美

人は嬉しいにつけ、悲しいにつけ、その心の中の思いを何かで表現せずにはいられないものである。例えば嬉しい時には、顔は明るくにこやかで、自然に鼻歌が出てくることもまれでは

ない。ところが逆に悲しい時には、顔色は暗く沈み、いくらこらえようと努めても、涙がおのずと眼ににじみでてくることもある。人の心は言わば、寄せては返す波のように絶え間なく揺れ動いている。晴れの日もあれば、雨の日もある。凪ぎの日もあれば、嵐の日もある。心の海のたゆたい、情感の波動、感性の起伏。それは単なる喜怒哀楽の発現に止まらず、平板な日常生活では決して自覚することのない心の深部をも時に暗示する。心の深層、言葉の意味の深み、それらをさりげなく垣間見させてくれるのが、言葉の芸術家たる詩人であり、また思索の達人たる哲学者ではなかろうか。かれらが心の実相、あるいは人生の真相をどのようにとらえ、それをいかに言葉で表現しているのか。古今東西の詩人や哲人の中から幾人かを選び出し、その文章を読みながら、時空を越えて変わらぬ生きることの意味、生きることの価値について考察した。

文　化　講　座

－大和の歴史と風土－

9月11日　天平人と“まじなひ”の世界

水　野　正　好

壮大な都・平城京。この都を華やかに彩ったのは天平人である。都をこの地に選ぶ、その時、天皇が信じたのは風水の思想であった。風水ととのい静安の地を求めての遷都であったが、死者の赴く墓地の選定にもこの風水は息づいた。飛鳥から運ばれた元興寺、聖武天皇が行基や光明子に支えられて建立した東大寺、聖武天皇の娘・孝謙天皇が東大寺を横目に建立した伽盤・西大寺、そうした寺院にも「まじなひ」の心が働いている。

都に住む人々、壮大な都だけに良きにつれ、悪しきにつれ、人の心は揺らぐ。子供の誕生には心づかい細かい胞衣壺の使用があり、罪や穢れの祓い流しには人形代が用いられた。胡病が流行すると胡神や胡従を描いた小壺が盛大に使われ、福神来たると聞けば白物（白米）を饌して喧噪の中で人々の心は高揚した。子供たちはコマを廻して高麗の鬼をふせごうとし、愛憎まっただ中の男女は、和合・離別のまじなひを、栄進を願う人々や失意の人々の間では呪咀の世界をとり入れた。まさに平城京の人々の息づかいが聞こえてくる想いがする。そうした中で天皇は中国皇帝のシンボル、衰冕十二章をととのえた色彩のあざやかな禮服をつけ百官の前に登場する。青丹よし寧楽の都はと歌われる都に、まことにふさわしい天皇の姿であった。夏草茂る宮跡はこうしたさまざまな想いを秘めた都の様子を語る遺跡であることを紹介した。

9月18日

大和の土地と政治

－条　里　制　地　割－

水野　柳太郎

大和平野には、条里制地割といわれる1町四方に区画された水田がまだ見受けられる。大阪平野や濃尾平野をはじめ、九州から東北地方にまで、その存在は広く報告されていた。しかし、耕地整理や区画整理、さらに最近の農業構造改善事業によって、条里制地割は急速に姿を消している。幸いにして、その存在がもっとも顕著であった大和平野は、農業構造改善事業の施行が遅れているので、水田の宅地化によって破壊された他には未だその姿を止めているところが多いが、失われてゆく危険は常に存在している。

失われつつある条里制地割に対する関心は、次第に強くなって、地割の保存も希望されており、地理学的な分布調査や考古学的な遺蹟の調査は進められつつあるが、文献史料を通じての研究はそれほど盛んとはいえず、その性格に関する理解も充分とはいえない。

大和平野の景観の特色でもあった条里制地割について、見過ごされていた文献史料の上から改めて考え、古代・中世史を通じて政治支配との関連を見出すことにより、大和の風土に対する関心を深めようとするのが今回の目的である。

9月25日

大和にみられる渡来文化

植野浩三

大和は遺跡の宝庫であるとともに、日本古代国家の発祥地であり、歴代の都が所在した場所として知られている。こうした歴史は、多くの渡来系文化によって実現し、支えられてきたことはご承知の通りである。都造りの都城からしてそうであるし、飛鳥寺・法隆寺などの寺院建立や仏像、または正倉院宝物に代表されるような、きらびやかな文物・文化がまず連想される。

しかし、少し視点を変えて、日本の原始・古代史の身近な部分をみると、意外と数多くの渡来文化・文物の存在、または影響があったことがよくわかる。もちろん弥生時代の米作りや金属器文化の伝来がそうであるし、さらに、古墳時代中期には鉄生産や窯業生産が開始し、馬・金工技術など多くの技術・文物が集中して渡来している。特に、近畿の玄関口である大阪平野では、こうした渡来人の来訪した痕跡や文物を数多く認め、日常の雑器である土器や、住居内の施設にも大きな変化が表われていることがわかっている。量的な差はあるものの、大和においても同様の状況が確認できる。ここでは、こうした古墳時代の日頃馴染の薄い渡来系文物を紹介して、その影響や周辺地域との比較を行い、朝鮮半島での状勢も併せて紹介し、渡来の経緯についても考えてみた。

10月9日　大塔宮護良親王と『太平記』

長　坂　成　行

大塔宮護良親王は後醍醐天皇の皇子、鎌倉幕府打倒のために大いに貢献したものの、後醍醐が隠岐から還幸するや足利尊氏をめぐって父帝と不和になり名和長年らの手によって捕縛される。のち建武の新政が瓦解し、中先代の乱の混乱のさなか、ついには尊氏の弟足利直義の指示により鎌倉の土牢の中で惨殺されるという悲劇的な最期をとげる。

『太平記』では「御幼稚ノ時ヨリ、利根聡明ニ御座セシカバ」という賛辞と共に登場するが、天台座主という仏教界の頂点に在りながら、「今ハ行学共ニ捨ハテサセ給テ、朝暮只武勇ノ御嗜ノ外ハ他事ナシ」という宮の有様を作者は「未ダカカル不思議ノ門主ハ御座サズ」と批評する。幕府軍上洛の報に京都を脱出した宮は奈良へのがれ、さらには吉野の蔵王堂に立籠り北条氏の大軍に抵抗する。やがて、これが楠正成らの活躍に結びつき討幕の大きな力となってゆく。この間、般若寺では唐櫃の中に身をひそめ危難を回避し、熊野・十津川では山伏姿に変じ僅かな家来と共に討幕挙兵の活動を続けた。

このような大和における大塔宮の逃避譚に焦点をあてつつ、『太平記』の叙述の虚実を探り、作者が宮をどのような眼で捉えていたのかを考えてみた。

10月16日　奈良盆地の水災害

吉　越　昭　久

「一年日照りで一年洪水」という言葉に象徴されるように、奈良盆地では古くから渇水・洪水などの水災害が頻発してきた。この理由として、盆地の地形・放射状の水系・気候条件・土地利用・水利用などがあげられるが、歴史的な背景まで含めた風土を理解しないと、その真の理由には迫れない。

ところで、現存する歴史的遺構の中には、環濠集落・請堤・溜池などのように、水災害の対策として造られたものもある。また比較的最近の対策としては、吉野川分水や捷水路工事・遊水池の設置などがあり、これらによって、確かに水災害は減少した。しかし、盆地周辺の丘陵部や盆地底の都市化によって、新しいタイプの水災害も起こるようになった。水災害は、奈良盆地にとって、古くて新しい問題である。

最近、水をその機能だけでなく景観の面からも捉えようとする傾向がはっきりしてきた。これがウォーターフロント・ブームであり、奈良盆地でもかなりの河川でこの取り組みがおこなわれている。この傾向は、現時点ではあまり明確にならないものの、奈良盆地の水災害に直接・間接にいろいろな影響を与えることになろう。

社会学部公開講座

まちづくりフォーラム　in　なら

－クリエィティブでファィンな地域（まち）にするために－

概　要　報　告

桂　　良太郎

平成５年10月30日(土)、雨の降りしきるなかではあったが、ならまちセンターにて、参加者96名とパネラー４名（奈良文化女子短大教授槙村久子氏、㈳奈良まちづくりセンター理事長の木原勝彬氏、奈良町倶楽部事務局長の田中宏一氏と桂）と司会の与謝野助教授を加え、総勢101名でもって、平成５年度社会学部公開講座が盛況のうちに開催された。参加者の内、男性は45％、女性は55％とほぼ半々で、しかも年齢構成も30歳代が37％、40歳代が46％、50歳以上が17％と各世代ごとからの参加者を得ることができ、最後のアンケートを提出して頂いた36名の参加者のほとんどが公開講座に参加して大変良かったという評価を得ることができた。

今回の公開講座のテーマは、社会学部としてぜひ―昨年の公開講座のテーマである「新しいライフデザインを考える」パートⅡとして、地域社会の創造にむけて何か良いテーマはないものかと模索していたおり、奈良市の計画している国際建築博覧会にむけて、大学として奈良のまちづくりに貢献できうる、しかも一般市民を対象とした講座が開催できないものかということで、パネリストの方々と学部とで延べ３回のブレーンストーミングの結果うまれたものである。

「まちづくり」というキーワードを三部に構成し、それぞれのパネリストから分かりやすい事例をもとに、問題提起し、参加者と共に質疑応答しながらフォーラム形式の講座とした。三つのまちづくりのキーワードとは、木原氏や田中氏が中心に行ってきた景観保全に代表される「住み良さづくり（環境づくり）としてのまちづくり」、と槙村氏が中心になって行ってきた奈良女性フォーラムの活動の「生きがいづくりとしてのまちづくり」、そして桂等が行ってきた福祉のまちづくり運動としての「安心づくりとしてのまちづくり」の三つである。

奈良に住んでいて良かったといえるまち（コミュニティ）をどう創造的に構築して行けるかさまざまな意見や提案がフォロアーからも出された。

当日のパネリストやフォロアーからの出された意見や提言(提案)の要旨は以下の通りである。

槙村久子氏：「女性論の立場からみたまちづくり」

現代はモデルのない社会である。自分の「ライフスタイル」は自分の意志で選択できるような時代に入った。そこでは、

1　新しいコミュニケーションによるライフスタイルを自分のポリシー（生き方）によって考えなくてはならなくなった。

2　家族、職場、地域社会が連続してそれぞれの能力を創造開発していかなければならなくなった。

3　安心してそこで「老いられる」社会が本当に奈良に来るだろうか。まさしく住民の創造力がためされている。

どう安心してそのまちに住むことができるか、これからは、生きがいの問題に加え、福祉や保健・医療だけでなく、教育や環境問題、都市計画のあり方まですべての分野や部署がこの「まちづくり」をキーワードとして考えて行かねばならない時代に来た。身近な環境の問題について住民の側からの政策提言をもっと行っていきたい。

木原勝彬 氏：「民間団体の立場からみたまちづくり」

まちづくりはそのまちの「宝さがし」でもある。生活者としての地域の価値を再発見し、それらを後生に残していくこと、一度潰した文化財はもう取り替えせないことに早く気が付き、生活の見直しをしていかなければならない。まちづくりは「予防・医学的視点」が今後重要であろう。そのためにもそこに住んでいる住民が主体となる「住民主導型のまちづくり」を考えなくてはならない。

田中宏一 氏：「市民の立場からみたまちづくり」

老朽化する古い家やたたずまいが壊されるのを見ていてこれではいけないと思いまちづくりに関心を持った。地域に「魂（こころ）」がなくては死んだ町である。生きがいをもてるまちにするために、目下「うずらや倶楽部」を中心に「町衆」の復活に取り組んでいる。

そのためにも、そこに若者と高齢者との交流が大切である。そのためにも、福祉のコミュニティづくりを早急に構築して行かなければならない。

会場からの主な意見や提言：

1　いま奈良は観光地として多くの寺や神社があるが、高齢者やハンディをもつ者はそこに入る事さえ出来ない状況にある。移動のためのボランティア組織の充実を期待したい。

2　新住民と旧住民との関係がうまく行っていないようにおもわれる。それらの障壁を取り除くためにも、奈良まちづくりセンターや奈良女性フォーラムはじめ、桂が取り組んでいる奈良地域福祉を考える懇話会といった、非営利の市民公益活動の振興をもっと図る必要性があるのではないか。

3　住民の意見をもっと行政に繁栄できるしくみづくりのあり方や問題提起などについて大学側からの積極的な参加を望みたい。

今回の公開講座は、社会学部の学生が縁の下の力となり、企画運営に直接参加し、市民との交流ができたことは何よりの教育的効果（成果）であったと思われる。ゼミ学生が実際にこの公開講座に向けて、ならまちを地域研究の実習を兼ねたフィールドワークを行い、そこで得た成果を踏まえながら直接参加した事はそれぞれの学生の中で何らかの思い出として残るものと思われる。最後にこの公開講座を開催するにあたり、奈良市、奈良教育委員会、㈶世界建築博覧会協会、㈶奈良町振興財団の後援を受けることができたことに対し、謝辞を表したい。